

中国中原における回族清真寺の空間様式とその特徴：河南省鄭州開封を例に

馬, 哲 / MA, Tetsu

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院デザイン工学研究科

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学大学院紀要. デザイン工学研究科編 / Bulletin of graduate studies.
Art and Technology

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

8

(発行年 / Year)

2023-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030181>

中国中原における回族清真寺の空間様式とその特徴 —河南省鄭州開封を例に—

SPATIAL STYLE AND CHARACTERISTICS OF HUI MOSQUES IN CENTRAL CHINA
—CASE OF ZHENGZHOU KAIFENG, HENAN PROVINCE—

馬哲

Tetsu MA

主査 高村雅彦

副査 岩佐明彦・小堀哲夫

法政大学大学院デザイン工学研究科建築学専攻修士課程

The Hui are the second most populous ethnic minority group in China, and their presence is almost all over the southeast and northwest of China. The Hui believe in Islam and rely heavily on mosques in their daily lives. I conducted a field study on mosques in Henan, China, and summarized the architectural characteristics of mosques in Henan by analyzing the spatial layout, architectural forms, and architectural decorations, as well as the lifestyle of the Hui people in Henan.

Key Words : Mosque, Hui, Henan Province, Architectural Features

1. はじめに

(1) 研究背景

中国は 56 種類の民族を持つ多民族国家である。各民族はそれぞれの信仰や風俗があり、それにより、独自の習慣と文化を持つ。同じ信仰を持つ民族があったとしても、地域により大きな違いがある。それぞれの民族文化は、各民族の建築空間様式を生み出す。

清真寺は、中国で唯一のイスラム教徒のための宗教建築で、最初は中東から伝来し、中国の漢文化の材料や技術、建築形式を取り入れながら、中原地区の土着文化との融合を積極的に進め、最終的に中国の特徴を持つ清真寺になっている。

近年、中国では急速な都市化と旧市街地の変貌が進みつつあり、回族などの少数民族が居住する地域の空間開発が議論されている。

(2) 研究目的と意義

本研究の目的は、例として中国中原地区の河南省鄭州市と開封市にある清真寺の建築空間を調査して、記録することである。中原地区に位置する河南省の清真寺の空間様式と特徴をまとめる。

河南省に現存する木造清真寺から着点し、清真寺の建築配置、主要建築、建築美術、装飾の観点から河南地区の清真寺の特徴を整理し、河南地域における回族と清真寺の発展を見る。このように、河南の民族の建築表現を探ることで、現状の少ない研究を補うことができる。

(3) 研究方法

本論文では、「文献調査法」、「現地調査法」、「実例分析法」の方法で研究を進める。

2. 河南省の回族

(1) 河南省の回族の発展

河南省には都市部、農村部を問わず多くの清真寺があり、小さな村には通常一ヶ所の清真寺があり、大きな村には一ヶ所以上の清真寺があることが多い。多くの回族は定期的に清真寺に礼拝し、女性は清真女寺で参拝する。回族は商業意識が強く、昔から「技術を知る、商売が上手」という特長があり、都市部に住む多くの人が食品業や旅館を経営し、農村に住む多くの人も農業の余暇に小さな商売を営んでいる。

(2) 河南省の回族の分布

河南省のほぼすべての市・県には回族が住んでおり、彼らはその集中する地域にモスクを建て、その周辺に「囲寺而居」する。河南省の回族の分布の特徴は「大分散、小衆居」に一致している。「囲寺而居」の背景には、回族の衆居があり、回族の社交や文化交流の習慣がある。「囲寺而居」の「寺坊」制度は回族の伝統的な住居形式である。中国の市場経済時代の到来と急速な都市化により、「囲寺而居」の空間分布は徐々に崩れてきた。清真寺はまだ存在するが、その周辺に集団で住んでいた回族は徐々に離れていく。全体的に回族の「大分散、小衆居」の分布は今も変わらないが、各都市部のコミュニティの観点

から見ると、「回寺而居」の特徴は徐々に「異族混居」になった。

3. 中国の清真寺

(1) 中国本土の清真寺の種類とその特色

宗教建築の一種である清真寺は、イスラム教が中国に伝わってから1400年以上の歴史がある。清真寺は、建設された時期や場所によって、大きく2つの系統に分けられる。ひとつは回族系であり、つまり回族が建てたイスラム建築である。その多くは、中国の伝統的な四合院の様式を採用しており、しかもいくつかの院落が連なっている多進式四合院の様式が多い。もうひとつは新疆ウイグル系であり、主に中国の新疆ウイグル自治区にあり、中央アジアのイスラム建築の特徴をより多く残し、現地の特徴と融合させながら発展を続けてきたものである。地理的に新疆ウイグル自治区は中央アジアに近く、この清真寺は、中国文化よりもイスラム文化の影響を強く受けている。

(2) 河南省の清真寺の種類と分布

表1 河南省の時期別清真寺の数と分布

時代	数	分布範囲	特徴
元代	15	6市	本格的に発展 点状分布 し始め
明代	136	15市	成長率の増加
清代	477	17市	開発の最高峰 带状分布
民国	709	全省範囲	開発の遅滞
新中国建国	810	全省範囲	緩やかに回復 面状分布
2015年	929	全省範囲	安定期

(3) イスラム文化が建築への影響

主要な建物配置から見ると、中国の清真寺は一般的に礼拝大殿、邦克楼、水房、そして礼拝大殿の中に窯殿や壁龕があり、その右側の（礼拝堂の北西角）宣教台がある。

建物の向きを見ると、敷地の位置にかかわらず、礼拝殿は必ず東向きに建てられ、壁龕は必ず西に背を向けていることがわかる。中国の西に位置するメッカ・ケルバインはイスラム教の聖地であり、世界中のイスラム教徒が礼拝をする際には必ず直面する場所だからである。

建築物の装飾に関しても、イスラム教は偶像崇拝を禁止しており、具体的な人物や像の使用を認めていない。中国の清真寺の大殿は、華麗なものであれ素朴なものであれ、色鮮やかな絵画で飾られているものであれ素朴な彫刻であれ、大殿内を爽やかな清々しいものにしていく。

4. 河南省回族清真寺の空間様式

(1) 空間様式の要素分析

表2 空間要素分析

空間様式の要素	研究内容	
位置	場所	清真寺の位置と周辺環境
配置	配置図	清真寺の空間機能と空間構成
	平面図	平面
	立面図	立面
	外部空間	外部空間と統合手法
主要建築	礼拝殿、望月楼、邦克楼など	主要建物の配置、外観、機能
装飾	漢装飾とイスラム装飾	装飾の特徴と文化の融合

(2) 鄭州北大清真寺

a) 基本概要

北大清真寺は鄭州で最も古く、最も大きなイスラム教の清真寺である。

鄭州北大清真寺は、1761年の碑文によると、明代に建てられたとわかる。1754年と1782年に2回の改修が行われた。1725年に大門と照壁を再建し、1802年に大殿が改修され、1907年には望月楼（邦克楼）が改修された。新中国建国後、1953年と1982年に清真寺の全体を改修した。現存の大門、望月楼（邦克楼）、大殿はすべて清代中期以後の建築である。

主要な建築物は、大門、望月楼、大殿、南北講經堂、水房、葬儀場である。昔北大清真寺には伝教講經の学校があり、武術の学校も設置された。これは、「回坊」の施設システムの完全性を示している。武術学校で武術を学ぶことで、「回坊」の防衛と坊内の秩序を維持することができる。

鄭州北大清真寺のある清真寺街は、鄭州で最も早くからイスラム教徒が住んでいた場所——「回々巷」である。

b) 空間配置

明・清時代に何度か改修された後、北大清真寺は中国の伝統的な多進式四合院の平面配置を採用し、院内には灰色のレンガが敷き詰められている。全体的な建築手法は清代のレンガ造りで、一部明代の部材を使用し、全体的な装飾はイスラム様式である。

北院には水屋、講經堂、碑亭などがあり、南院には葬式を行う葬儀場となっている。主院は外側から内側まで、大門、望月楼（邦克楼としても使用）、脇門、大殿、南北廂房で構成されている。南北側の廂房は水房として使

用するのが足りないため、北側の院落に独立した水場が設置された。

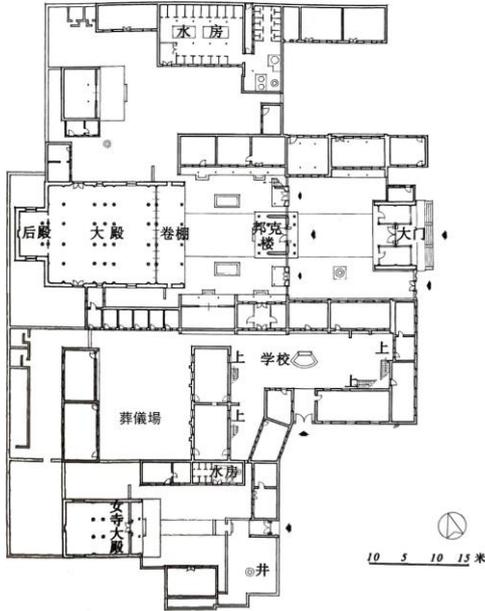


図2 鄭州北大清真寺配置図

北大清真寺の平面図は、主な配置と副次的な配置が明確に定義されており、合理的な配置で、左右対称、完全な空間秩序、開放的で明快な平面配置である。中国北部の建築によく見られる特徴である。

ここで一つ面白い点は、イスラム教の礼拝に参加するには、必ず水房で体を清めなければならないである。普通に動線から設計すると、水房の利用率がかなり高いため、大門と大殿の間に設置するのが便利である。しかし、水房は中の路ではなく、左の路に設置された。こうになると、礼拝に参加する回族ムスリムは大門から入って、大殿の前の卷棚の隣の門を通して左の路の水房にいき、体を清める。ここからは、中国式清真寺は便利性よりは建築物の様式と配置の方が注意しているところが認識される。

c) 建築物

鄭州北大清真寺の山門は清の雍正三年（1725年）に建てられ、幅3間、奥行2間、単檐歇山屋根式の建築である。屋根は緑色の瓦で覆われ、主棟の両端には竜の吻獸、中央には龍頭と宝瓶、四角には走獸がある。棟の先には角梁の前に3匹の走獸のセットが飾られ、その下に風鈴が吊るされている。清代の伝統的な様式を完全に踏襲している。

大門の特徴は、その構造にある。中国の木造建築の構造には、大きく分けて「穿斗式」と「抬梁式」という2つの系統がある。穿斗式は中国南部地域で広く採用されている。抬梁式は、中国北部や大きな宮殿や寺院の建築に広く用いられる。

北大清真寺の大門は、穿斗式と抬梁式の両方の構造を組み合わせられており、山壁に穿斗式の構造、間に抬梁式の構造が使用されている。このような混合式により、より広いスペースが確保され、大きな木材の使用量も少なくなる。このような混合式は中国南部で多く、北部では比較的まれである。鄭州で現存する木造建築物で、混合式の構造はこの1つしかない。



図3 北大清真寺の山門

碑文によると、北大清真寺の望月楼は清の光緒三十三年（1907年）に建てられた。2階建ての建物で、重檐歇山屋根閣式建築である。構造としては木造抬梁式が使われている。構造で見ると明の建築の可能性が高いが、清代に改修される時は斗きょう、屋根など全部新しくしたかもしれない。



図4 北大清真寺の望月楼

大殿、礼拝堂とも呼ばれている。北大清真寺の大殿は4つの部分があり、前部は卷棚、中部は前後二つの礼拝殿、後部は窯殿となっている。中国伝統的な建築が繋がって、平面的には「凸」字となっている。建築の組み合わせは「勾連搭式」で、外壁がつながり、屋根は天溝でつながり、室内は前後に繋がっているが特徴である。

大殿の内部に入ると、まず特徴となっているのは梁に描いてある植物の模様である。河南省の他の清真寺と比べて、白黒の模様が白と黒の柄は、鮮やかすぎず上品な印象である。また、殿内の北西の隅に宣礼台がおり、窯殿と礼拝殿の間には木製の間仕切りで仕切られて

いる。その仕切りは豊富な彫刻で装飾し、こんな華麗な装飾がある窯殿の仕切りは河南省の清真寺には少ない。



図5 北大清真寺の礼拝殿内部

d) 装飾

大門の外の壁の彫刻でもここはイスラム教の建築が分かる。イスラム教の教義は建築や本の装飾には具体的な人物像や動物像禁止されている。北大清真寺の装飾はイスラム教の教義に従って、幾何模様、植物模様、アラビア語模様の装飾で飾っているが、やはり中国本土の文化の影響も受けて、中国では吉祥の象徴である桃、松、珊瑚などの彫刻もある。



図6 北大清真寺の屋根

屋根に注目すると、棟にかなり豊富的、華麗な装飾がある。基本は植物と龍の彫刻である。龍は具体的な偶像であり、イスラム教の教義では使うのが禁止されているはずが、ここでは普通に使われている。

また、こんなに華麗な装飾がある屋根が他の地域の清真寺には多くない。清真寺以外の建築であれば、中国南部の嶺南地域の建築の屋根を連想できるが、嶺南地域の建築ほどの華麗さではない。しかし、前述したように、清真寺の大門の構造が中国北部では少なく、南部ではよく見れる。実際に影響を受けているかもしれない。

大殿の内装でより特徴であるのは、色彩画の豊かさである。屋根の梁、垂木、枋には、色とりどりの絵が描かれている。また、垂木には雲の模様や花、草などさまざまな絵が描かれている。その模様は一つ一つ異なり、非

常に変化に富んでいる。梁には、アラビア語、錦模様、花模様、水模様が多用されている。梁の下には、蘇式色彩画が描かれている。描かれた体系の多くは、公式の北京様式にはないものである。色彩画はグレーと白を中心に黒のラインが入っており、シンプルで印象的である。



図7 北大清真寺の大殿の間仕切り

さらに特徴的なのは、後方の窯殿と主殿の間に使われている間仕切りで、花の模様がくり抜かれており、その花の模様は草花の幾何学模様であることである。この間仕切りの成功しているところは、彫刻そのものだけでなく、奥の窯殿が非常に明るく、本殿が暗いため、本殿から窯殿（神棚）を見ると、模様がその暗さではっきりと識別でき、絶妙の透明感と華やかさを持つ特別な芸術効果を呈していることにある。

(3) 朱仙鎮清真寺

a) 基本概要

朱仙鎮清真寺は、河南省開封市朱仙鎮に位置し、朱仙鎮における最大の清真寺で、河南省における最古の清真寺である。北宋の太平興国時代に最初に建てられたと言われている。朱仙鎮の西街村は、回族が集まる村で、朱仙鎮清真寺がこの村に位置する。

清真寺の碑文と記録によると、1531年に再建、1641年に黄河の洪水で破壊、1738年に再建、1744年と1839年の2回にわたって増築されたことが明らかになっている。今の建築配置は北大清真寺と同じ、中国伝統的な四合院式であり、建築様式は完全に清の建築様式となっている。

b) 空間配置

朱仙鎮清真寺の全体的な建築は、清朝時代のイスラム教のモスク建築の典型的なものである。朱仙鎮清真寺は、前山門、碑楼、卷棚、大殿、窯場、耳房、南北廂房、水房、後山門、「回」字の中庭の配置で構成されている。

朱仙鎮清真寺の建築様式は、イスラム建築と中国の伝統的な建築様式が融合したものであり、典型的な「回」字型の配置で、前院と後院に分かれ、厚い壁で囲われた。中庭の正殿に通じる道の両側に回廊があり、古代中国の宮殿建築によく見られる左右対称性がある「一殿両廊」の建築様式である。また、中庭はイスラムの荘厳さを強調する「回」の字型に設計されており、中国の伝統的な宮殿様式とイスラムの様式が見事に融合した寺院となっ

ている。朱仙鎮清真寺は、清代のイスラム教の清真寺建築と文化の典型的な例である。

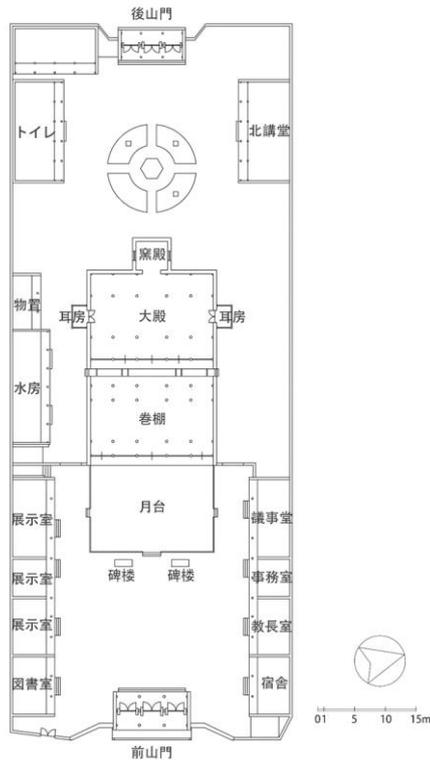


図 8 朱仙鎮清真寺配置図

c) 建築物

朱仙鎮清真寺は、幅 3 間、奥行 2 間で、左右の八角扇形の壁と同じく、灰色の煉瓦で造られている。片切妻屋根には緑色と黄色の瑠璃瓦が敷かれ、主棟には宝瓶が飾られている。山門の前後の破風は、彫刻を施した石柱で支えられている。8 本の石柱は明の嘉靖十年（1531 年）に山門を増築する時に中国南部から運ばれてきたものである。柱には山水画、人物像、植物、飛鳥の絵柄で飾られている。



図 9 朱仙鎮清真寺の礼拝大殿

礼拝大殿は、中国の伝統的な硬山抬梁式の建築で、高さは約 20 メートルあり、側面に耳房があり、正面に広い月台と硬山抬梁式の卷棚があり、背面に抬梁式の窠殿がある。特徴となっているのは、朱仙鎮清真寺の卷棚が非常に広くて、勾連で大殿とつながっているが、屋根は繋がっていない。大殿との間には渠と四つの石橋があり、両端の石橋から外に出れる。非常に面白いデザインである。大殿の平面配置も「凸」字になっており、大人数が同時に礼拝できるように、抬梁式の構造作法でつくられることで広く出来ている。大殿内部の採光条件を改善するため、両側に大きい扉と耳房が配置されて、大殿の内部は明るい。



図 10 朱仙鎮清真寺の大殿

d) 装飾

建築の細部では、朱仙鎮清真寺の建築がイスラム教の模様で飾られて、木やレンガの彫刻、石の彫刻など素材で飾られている。アラビアの植物模様は、幾何学模様と同様に、抽象的な幾何学模様の中に、しなやかな茎や蔓など、植物の外形を取り込んで表現されている。



図 11 朱仙鎮清真寺の山門の彫刻

朱仙鎮清真寺の石、木、レンガの彫刻は精巧で、主要な建築部材は彫刻で覆われている。彫刻は花や鳥、山水風景、人物物語で、例えば「鶴と梅」「鶴と鹿」「仙人と桃」などのモチーフは、幸運の象徴であり、平和と幸福を祈願するものである。このような具象的な装飾は完全に中国式であり、イスラム教の教義に従って禁止され

ているはずである。

レンガの彫刻は、菊を中心とした花と、イスラム教の教義を表す詩を連続した模様で表現している。イスラム文化と土着文化の融合は、建物の装飾にも表れており、アラビアの装飾は深遠な宗教的寓意を反映している。

(4) 開封東大清真寺

a) 基本概要

開封東大清真寺は順回族区の清平南北街西側に位置し、中原にある明清建築の特徴を持つ、保存状態の良い大規模な中国古代イスラム宮殿様式の建築物である。

この寺の歴史は古く、創建された年は不明である。寺内にあるの石碑によると、遅くとも 1407 年に再建され、その時はすでに中原地区におけるかなり規模が大きい清真寺であった。1841 年に黄河の洪水により破壊された。洪水と闘う回族ムスリムたちの姿に心を打たれ、役人たちは清真寺の再建を宮廷に要請した。その後、1846 年にまた再建された。現在の東大寺の形は、1846 年の再建と同じ規模、建築様式を踏襲している。文化大革命の際、清真寺は損傷を受けたが、新中国成立後の 1989 年から 1990 年にかけて、正門、側門、塼が修復された。

b) 空間配置

東中国の伝統的な四合院の空間配置を採用し、閉ざされた中庭で一連の建物全体を繋ぎ、大殿を中心とした左右対称の中心軸と、主従関係を明確に区別しているのが特徴である。大門、二門、拜殿、北講堂、南講堂、廂房がある。

大門は 5 間幅で、硬山式屋根を持ち、金色の蘇式絵画が描かれている。二門の外には武術館がある。北側の建物は、亡くなったイスラム教徒のための葬儀場となる。

二門を入ると広々とした中庭があり、講義室やイスラム協会の事務所が並んでいる。中庭の真ん中には、元々「望月楼」が配置された。

中庭の西側の中央には大殿があり、大殿の前には広い月台と卷棚がある。大殿の両側に配殿があり、北側の配殿はイマームの住居と集会所、南側の配殿は一時的に清真女寺になっている。

c) 建築物

東大寺の卷棚は歇山式で、構造は抬梁式を採用しているため、ひろくできた。



図 13 東大清真寺の礼拝大殿

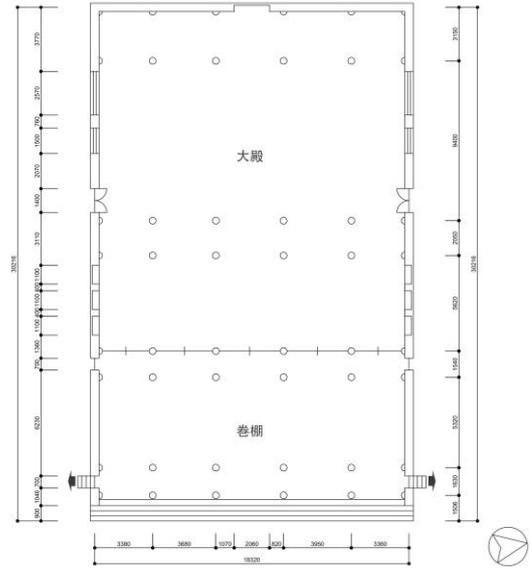


図 12 東大清真寺の礼拝大殿平面図

大殿は硬山屋根、緑色の瑠璃瓦で敷いて、主棟の上に宝瓶の飾りがある。大殿内部は柱と花の装飾、そして宣礼台以外の装飾品は一切なく、シンプルで優雅、清潔で厳かな雰囲気がある。窯殿の壁龕にはアラビア語の経文が彫られ、扉の両側にはアラビア語の経文の対聯が書かれていて、広々とした明瞭な空間になっている。採光条件の考慮で、大殿の両側に扉二つ、窓四つ配置されて、大殿の内部がかなり明るくできている。また、もう一つ特徴となっているのは、東大寺の大殿では窯殿がなく、直接に奥の壁に壁龕を設置した。



図 13 東大清真寺の大殿内部

c) 装飾

開封東大清真寺の装飾は鄭州北大清真寺と朱仙鎮清真寺と比べて、比較的少ない。特に大殿の内部の装飾はかなり素朴である。建築の構造部品の彫刻は少なく、大体色絵となっている。色絵は現代に修復される時に描いたものが多く、イスラム教の模様は非常に多く、更に黄色の顔料を使っていて、むしろイスラム教の模様をメインで描いたとも言える。東大寺のイスラム教の模様は基本アラビア語模様が使っている。

屋根の装飾も鄭州北大清真寺と朱仙鎮清真寺と違って、瓦の彫刻がほぼない。



図 13 東大清真寺の扉の装飾

壁龕では、中国式の屋根仕様の装飾とイスラム式の植物彫刻とアラビア語の対聯が融合してうまく使われている。



図 14 東大清真寺の壁龕の装飾

5. 河南省回族清真寺の特徴

(1) 空間様式

中原地区の清真寺の平面配置は、他の宗教建築と異なり、建築群の院落が少なく、空間的な階差も少ない。その代わりに、中心建築が特に突出しており、礼拝大殿のボリュームが他の建築よりはるかに上回る。

また、清真寺は回坊にあり、住民たちは地域の気候で住宅を南北方向に配置する必要があるが、イスラム教の礼拝では聖地メッカ・ケルバイの方向が求められるため、礼拝大殿を西から東に向ける配置にする必要がある。この配置の矛盾により、清真寺の奥行きは近隣のスケールによって制限され、大規模な清真寺が2～3つの院落があり、小さい清真寺が一つの院落しかない場合も多くある。また、礼拝に必要なスペースが広く、祭りのとき同時に大勢の回族ムスリムが礼拝しにくるため、礼拝大殿の前の院落は、条件からして可能な限り広くなる。

中原地区では、礼拝大殿は勾連搭の手段で卷棚、大殿、中殿、後（窯）殿の4つの建築を組み合わせた形で建てられるのが一般的である。中国の木造宮殿式建築では珍しく、建物の奥行きが幅よりも長くなっており、この空間構成が礼拝の要求を満たし、建物の内部空間が広がっ

ているのである。

建築物の整備では、礼拝殿、水房、南・北講経堂、教長室は必ずあり、大規模な清真寺では、学校、葬儀場、卷棚、月台が整備されているのは一般的である。望月楼・邦克楼が配置されている清真寺は河南省では少なく、かなり重要な清真寺しか配置されていない。その中、開封東大清真寺のような、昔があり、今はもうなくなる場合もある。

そして、清真寺の礼拝殿に入るのには靴を脱がなければならないので、殿内の床は石ではなく木の板で出来ており、床は常に清潔に保つ必要がある。更に長時間の礼拝をするために、絨毯がたくさん置いてある。

(2) 模様と装飾

レンガ彫刻は、中国の伝統建築によく用いられる装飾技法のひとつで、河南省の清真寺もレンガ彫刻を建物の装飾としてうまく利用しており、主に壁や裏壁などに、植物や幾何模様をモチーフにしたものが多く、少数ながら龍や鳳凰をモチーフにしたものもある。

河南省の清真寺では、斗きょうや梁、額枋などに木彫が多用され、植物をモチーフにした装飾を中心に、龍、鳳凰、麒麟、鴛鴦などの吉祥な動物や、祥雲や宝瓶などの中国伝統装飾が施されている。また、イスラム文化の反映として、アラビア文字が刻まれた小さな飾りも設置されている。

清真寺に装飾されている色絵は、青色と緑色を基調とし、山水風景、植物、幾何模様を主に使って、龍のモチーフもわずかに表し、中央にアラビア語が書かれたものもある。

対聯は河南省の清真寺の装飾の中でも重要な位置を占めている。特に大殿の前の卷棚に多く設置している。清真寺の歴史や文化的な意味合いを反映している。漢字とアラビア語の両方があり、黒地に金色の文字が一般的である。

伝統的に、イスラム教の教義は偶像崇拜の禁止を唱えており、礼拝所の内部においても、壁龕を神聖の象徴として使われ、具象的な偶像は一切許されない。中国本土の文化の影響を強く受けた中原地区の清真寺では、装飾は花や幾何模様に限らず、動物をモチーフにした具象的な造形も見られるようになり、中国の伝統文化で吉祥を表すこれらの動物モチーフは、回族の人々にも一般的に受け入れられていたのである。同時に、清真寺の装飾はイスラム教の特徴を反映することを忘れず、アラビア文字の装飾を多用し、例えば中国の伝統文化を表す花瓶にはアラビア文字が刻まれ、中国の伝統文化とアラビア文化の融合が十分に反映されている。

これらの装飾は、基本的に卷棚でも使用される。大殿の内部は通常、木彫りの装飾はなく、シンプルで清潔感がある。礼拝の空間では、壁龕は必ず唯一の注目点でなければならない。

6. 結語

中原にある伝統的な清真寺は、中国のイスラム教の清真寺の典型的な例である。ここの回族ムスリムは古くから心から中国文化に共鳴しており、清真寺の建築がイスラムの伝統を踏襲しつつ、中原の地域性とうまく調和している。これは、ムスリムの先人たちが、イスラム文化と中国漢民族の文化を融合させるために一連の努力を重ね、その過程で文化的適応力と包容力を発揮したことを示している。

漢民族化の規律から見ると、まずは完全に中国式の木造建築の建造技術を採用して、回族ムスリムが利用するのに適した集中的大空間を作り上げる。次に、建築配置から見ると、中国伝統的な四合院式をベースに、イスラムの宗教的意味合いに富んだ建築群配置を形成している。最後に、美意識から見ると、次第に中国の伝統的な文化である吉祥を表すモチーフが受け入れられ、動物モチーフを使用してはいけないという教令は厳しくなくなった。加えて、イスラム教宗教文化が持つ装飾的な特徴も取り入れている。

河南省の清真寺は、中国の伝統木造建築の包容力と適応力を十分に体現しており、河南省の木造建築の重要な構成要素となっている。河南省の清真寺は、中国の伝統木造建築の包容力と適応力を十分に体現しており、河南省の木造建築の重要な構成要素となっている。回族ムスリムの日常生活は清真寺から切り離すことができない。イスラム教の象徴である清真寺は、それ自体が宗教の広がりや宗教的な雰囲気作りに大きな役割を担っている。今日、急速な都市開発と発展で、清真寺は周辺の回坊の大規模な取り壊しにより、徐々にその養分となる土壌を失いつつある。清真寺にはもっと注意を払い、保護する必要がある。オープンマインドな都市は、もちろん多様な建築文化の集合体であるべきであるが、多様な文化と風俗も欠かせない。革新と保存、参考と創造、開発と維持、これは今私たちが考え、行動しなければならないことである。

謝辞：

本論文の作成にあたり、終始適切な助言を賜り、また丁寧に指導して下さいました高村雅彦先生に感謝します。高村研究室院生の皆さん、そして、たくさん協力してくれた両親に深くお礼を申し上げます。

参考文献

- 1) 『河南省誌・民族誌』
- 2) 楊永昌, 『漫談清真寺』 寧夏人民出版社, (1981.8)
- 3) 劉致平, 『中国イスラム教建築』 中国建築工業出版社, (2011.5)
- 4) 李尊傑編集, 『河南百坊清真寺』 民族出版社, (2009.9)
- 5) 藩谷西編集, 『中国建築史』 中国建築工業出版社, (2015.4)
- 6) 白天宜, 「開封伝統清真寺建築研究」 (2020.9)

- 7) 張萍萍, 「元から民国まで河南省清真寺空間格局変遷と影響因素分析」 (2019.6)
- 8) 胡雲生, 「伝承と認同一—河南回族歴史変遷研究」 (2005.4)
- 9) 白天宜, 「開封伝統清真寺建築研究」 (2020.9)